

ПОТОМУ ЧТО の用いられた複文における動詞のアスペクト¹

恒 任 翔 吾

はじめに

本稿が目的とするのは、ПОТОМУ ЧТО による因果関係の表現という具体的な構文の中で動詞の体がどのように振る舞うかを観察し、体の持つ特徴を明らかにすることである。

ПОТОМУ ЧТО の複文において動詞の体を調べるひとつの利点は、原因と結果の関係性の中にあつて、構文による制約が比較的に見えやすいことである。ことばが「状況に埋め込まれたもの」であり、「『ヒト』、『モノ』、『コト』、それぞれの絶え間なき相互作用の中で発現していくもの」である² とすれば、ПОТОМУ ЧТО の複文は、そのような「状況」、「相互作用」を限定、あるいは少なくとも可視化を助けるものになると考えられる。

因果関係について、本体論的に定義することは困難であり、何と何が因果関係を持つかは「どこかで認識者が規範として決定してゆくしかない」³ とされることさえもあるほどである。しかし ПОТОМУ ЧТО などの接続詞における因果関係についていえば、これは話者によって主体的に確立される関係であり、これが必ずしも哲学で論じられるような性質をとまらぬ必要はない。⁴ つまり、話者という因果関係を確立する主体を置くことで、自然言語における因果関係は本体論的な因果関係から区別されるのである。そのとき、科学的、論理的な因果関係については、主体が再解釈し言語に取り込むことになるといえるだろう。表現を変えれば、因果関係のカテゴリーは「環境に対する主体の態度を反映しながら言語の中に実体化されるカテゴリー」なのである。⁵

このように接続詞を置くことにも語る主体の態度がかかわってくるのだとすれば、そこで動詞の体はどのように選択されるだろうか。これが本稿における主要な問題意識である。

¹ 本稿は大阪大学大学院に提出した修士論文「因果関係のロシア語複文表現における動詞の体の意味」（2016年）に新たな考察を加え、再構成したものである。

² 林田理恵『ロシア語のアスペクト』南雲堂フェニックス、2007年、29頁。

³ 一ノ瀬正樹『確率と曖昧性の科学』岩波書店、2011年、73頁。

⁴ Хааг. Эрика-Оксана. Функциональная типология. дисс. ... д-ра философии. Tartu, 2004. С. 136-137.

⁵ Дальбергенова Л.Е., Жаркынбекова Ш.К. Исследования каузальных отношений в современной лингвистике // Современные проблемы науки и образования. 2013. № 6. С. 8.

1. 調査方法

потому что は従属節をつくる接続詞のひとつであるが,⁶ 本稿においては以下、従属節を原因節と称し、同様に主節を結果節と称する。

ここで扱うのは、現代ロシア語のテキストから接続詞 потому что が用いられた、原因節が結果節（主節）に後接する文である。потому что を用いるのはこれが因果関係の接続詞の中でプロトタイプの的であるとされており,⁷ また最も広く用いられる原因の接続詞であるとされている⁸ ためである。

分析対象となるデータは、Библиотека Максима Мошкова のランキング上位 40 作品⁹ から抽出した。まず対象作品群を「потому(,) что」（小文字指定）で検索した結果、855 例の文が得られた。それから、原因節そのものやその内部の動作が否定されているもの（не потому, что; потому что ... не ...）, 原因節において быть を述語とするものをとりのぞき、また хотеть, мочь, бы などモダリティが強い語が用いられたものも、体の選択における話し手の判断等の分析を難しくするものとして、とりのぞいた。さらに完了体動詞過去および不完了体動詞過去が原因節において主要な述語となっているものを抽出した。このように得られた 177 例を、結果節における述語や、原因節と結果節の関係等を分類した。

2. 集計結果

表は、原因節における動詞の体・時制ごとに、結果節における動詞の体・時制を分類したものである。結果節において успеть, мочь, смочь などが用いられたものが別に集計してあるのは、これらは話し手の判断等の分析を難しくするものであり、文中での振る舞いを個別に分析する必要があると判断したためである。

全体として、完了体動詞と不完了体動詞の過去形は потому что の原因節の中に同様の頻度で現れる（それぞれ 93 例, 84 例）ということがみて取れるだろう。

また、完了体動詞過去が原因節に用いられている場合、結果節には不完了体動詞過去がほとんど現れないという点が目につく。このとき計 93 例中 40 例（否定をのぞいて 37 例）の結果節に完了体動詞過去が現れ、不完了体動詞過去が現れたのはわずか 6 例（同 5 例）

⁶ Крючков С.Е., Максимов Л.Ю. Современный русский язык: Синтаксис сложного предложения. Учебное пособие для пед. ин-тов. М., 1969. С. 110.

⁷ Оркина Л.Н. Аспектуально-темпоральная характеристика высказываний с семантикой обусловленности в современном русском языке. дисс. ... д-ра филол. наук. СПб., 2000. С. 24.; Хааг. Функциональная типология. С. 66-67.

⁸ M. Sereda-Linley 『ロシア語母語話者における因果関係の表現の習得について』博士論文, 大阪大学, 2007年, 90頁。

⁹ [http://lit.lib.ru/rating/top40/] (2015年10月24日閲覧). 作品の一覧を本稿末尾に付した。

である。一方で原因節に不完了体動詞過去が用いられている場合、結果節の動詞に体の偏りはみられない。

表 原因節の動詞の体・時制に対する結果節の述語の分布（計 177 例）

結果節	原因節	
	完了体動詞過去	不完了体動詞過去
完了体動詞過去（うち否定）	40(3)	29(3)
不完了体動詞過去（うち否定）	6(1)	29(7)
完了体動詞現在未来（うち否定）	2(0)	0(0)
不完了体動詞現在（うち否定）	9(0)	3(0)
успеть（うち否定）	10(9)	0(0)
мочь（うち否定）	1(1)	3(3)
смочь（うち否定）	2(2)	0(0)
быть 過去（うち否定）	4(0)	12(4)
その他	19	8
計	93	84

次節から、実際に例を見ながら動詞の体がどのように用いられているかを検討していく。

3. 完了体動詞が原因事態を構成する場合

3-1. 結果節において完了体動詞が用いられている場合

ここで見ていくのは原因節・結果節の両方で完了体動詞過去が主要な述語となっている例である。原因の多くはパーフェクト¹⁰ 機能によって結果節時点における状況を構成する

¹⁰ マスロフは完了体の意味について「パーフェクト的変種」「アオリスト的変種」という用語を用いることがあった。パーフェクトは動作の結果が残った状態を示すものとされるが、完了体の過去形の用法においては、頻度としては稀な明示的パーフェクトから、状態パーフェクト、動作パーフェクトと経て、アオリストの意味（脚注11参照）までの意味的グラデーションをつくとされる：*Маслов Ю.С. Перфектность // Избранные труды: Аспектология. Общее языкознание. М., 2004. С. 427-428, 434.; L. Hulaniccki, "The actional perfect in Russian," Slavic and East European Journal 2, no. 17 (1973). pp. 178-179.*

ものとなっていたが、原因節と結果節の動作が互いに隣接し、それぞれの動作がアオリスト¹¹ 的意味をもちながら、継起的に展開する場合¹² も見られた。

3-1-1. 結果状態が原因となるもの

まずは結果状態そのものが原因とされている状態パーフェクト的な例である。発話時点の状況ではなく、結果節の時点における状況が構成されている。

(1) Вика так сказала, **потому что** разозлилась. Очень.¹³

ヴィーカがそのように言ったのは、怒っていたからだ。とても。¹⁴

(2) Из сотни людей на этом тесте *ошиблись* только двое, **потому что** я *загрузил* их психику ответственностью: "Этот тест прошли более сотни человек, и никто не ошибся".¹⁵

100 人の中で、そのテストを間違えたのは二人だけだった。彼らの精神を責任感でいっぱいにした [загрузил] からだ: 「このテストは既に 100 人以上が受けたが、だれひとりとして間違えたことはない」。

これらは状態にもとづいた理由づけであるにとらえられよう。例文(2)には具体的なセリフが用いられており、具体的動作そのものも想定されていると解釈できるものであるが、あえて *закружил* という語を選択していることから、結果節の事態を引き起こしたのは原因節における発話ではなく、その結果（責任感でいっぱいな状態）と考えるのが自然である。ただし、両例とも心理的な結果、すなわち非物理的結果であるということは指摘しておくべきであろう。

以下の 3 例も結果状態が原因となるものと捉えることが可能だろう。

¹¹ アオリストは古期ロシア語 (древнерусский язык) も含め多くの言語にみられる過去時制のひとつであり、このアオリストは、それらの言語において過去を表すもうひとつの時制形式、インパーフェクトとの対立の中にあって、「動作、出来事を過去の事実としてただ確認する (просто констатирует)」時制 (Маслов, Ю.С. Очерки аспектологии // Избранные труды: Аспектология. Общее языкознание. М., 2004. С. 39-41.), あるいは「“報告する”または“物語る”」(金田一真澄『ロシア語時制論—歴史的現在とその周辺』三省堂, 1994年, 91頁) 時制であるとされる。この意味が時制形式の再編を経て、現代のロシア語のアスペクト・カテゴリーに引き継がれているのである。

¹² アオリストの意味がもっとも明確に現れるのは、現在から切り離されて「逐次的な動作の連続」において語られるときである: Маслов. Перфектность. С. 434.

¹³ Анчаров М.Л. Самшитовый лес [http://lit.lib.ru/a/ancharow_m_l/samshit.shtml] (2015年10月24日閲覧).

¹⁴ 以下、例文の和訳は本稿執筆者による。

¹⁵ Рудь В.Н. Духовное врачевание или Реодчизм [http://lit.lib.ru/r/rudx_w_n/text_0010.shtml] (2015年10月24日閲覧).

(3) Они *надели* пионерские галстуки и *пошли* на праздничный ужин, **потому что** их туда позвали.¹⁶

かれらはピオネールのネクタイをつけて晩餐会に向かった。かれらはそこに呼ばれていたからである。

(4) Глеб пришел потому, что Филидоров пришел; Филидоров пришел потому, что Толя пришел; Толя *пришел потому, что* Вика *попросила*, Вика - журналистка, которой нужно взять интервью у ученых.¹⁷

グレップが来たのはフィリドロフが来たからだ；フィリドロフが来たのはトーリャが来たからだ；トーリャが来たのはヴィーカが招待したからだ。ヴィーカはジャーナリストで、学者にインタビューする必要がある。

(5) И когда подошел автобус сорок восьмого маршрута, они *зашли* в него через разные двери, **потому что** еще в квартире Светлана *попросила* Сергея на улице и в транспорте, делать вид, что они не знакомы.¹⁸

そして 48 番ルートのバスが到着したとき、二人は別のドアからバスに乗った。アパートでスヴェトラナがセルゲイに、外や交通機関で知り合いでないふりをするよう頼んだからだ。

(3)の例においては、原因節で目的語がテーマ化、動作主が省略されており、「呼ぶ」動作を具体的にとらえるのが難しい。これは結果状態（呼ばれた状態）であると見るのが適当であろう。ただし、*позвали*、*попросили*などの語は、(1)(2)の例にはみられないような結果節との結合をみせている。これらの動詞は、そこに含まれる語彙意味によって、*пошли*、*пришел*などの、特定の動作の実現を要求しているのである。

3-1-2. 隣接する動作

原因節の動詞がアオリスト的な意味をもっとも強く持つのは、原因節の動作が結果節の動作と時間的、空間的に接する場合である。

(6) Сапожников, не стесняясь, *заплакал*, **потому что** *услышал* тихий взрыв.¹⁹

サボジニコフはきまり悪く思うこともなく泣きはじめた。小さな爆発音が聞こえたからである。

¹⁶ Анчаров. Самшитовый лес.

¹⁷ Там же.

¹⁸ Уланов О.В. АНО [http://lit.lib.ru/u/ulanow_o_w/text_0060.shtml] (2015年10月24日閲覧).

¹⁹ Анчаров. Самшитовый лес.

(7) Сергей тоже *поторопился*, **потому, что** увидел, что она собралась сесть на подъехавший трамвай.²⁰

セルゲイもまた急いだ。彼女が近づきつつあるトラムに乗ろうとしているのが 見えたからである。

両例とも知覚動詞が用いられ、原因節の具体的な事態（知覚）が結果節の別の事態を引き起こしていることが見て取れる。ふたつの事態が同じ時間、空間を共有していると述べることも可能だろう。これらの例では、共有された時間、空間のなかで原因節と結果節の動作は連続した出来事として並べられている。原因節に用いられた動詞の中には結果状態を志向するものもあるが、むしろそれが結果節の動作の直前に起こったことで（つまり、状態の生起そのものが）、いわば次に生起する動作の「きっかけ」となるような役割を果たしているのである。

3-2. 結果節において不完了体動詞が用いられている場合

集計結果においては頻度が低かったが、原因節に完了体動詞過去を取り、かつ結果節が不完了体動詞過去になる場合をみていく。

(8) Один раз я прошелся задом наперед и *боялся* потом целую неделю, **потому что** бабушка сказала: "Кто ходит задом, у того мать умрет".²¹

一度ぼくは前後逆に歩いて、その後一週間のあいだ恐れることになった。祖母が「後ろ向きに歩いた人の母親は死ぬんだよ」と言ったためだ。

(9) Сегодня эти прилеты ангела особенно *чувствовались*, **потому что** на выставке *выпал* снег и *обложил* павильон, словно ватой.²²

展覧会に雪が降って、パピリオンを綿のように覆っていたので、今日は天使のそういった飛来がとくに感じられるのだった。

(10) Некоторое время они вообще были "в споре", так как Пастернак в разговоре сказал, что любой деревенский Иван лучше него *знает* русский язык, **потому что** *унаследовал* его с молоком матери, — это у него в крови.²³

²⁰ Уланов. АНО.

²¹ Санаев П. Похороните меня за плинтусом [http://lit.lib.ru/s/sanaev/plintus.shtml] (2015年10月24日閲覧).

²² Зайончковский О. Петрович [http://lit.lib.ru/o/oleg_z/text_0010.shtml] (2015年10月24日閲覧).

²³ Рольникайте М.Г. Это было потом [http://lit.lib.ru/r/rolxnikaite_m_g/text_0020.shtml] (2015年10月24日閲覧).

しばらくのあいだ、かれらは概して「不和の仲」にあった。パステルナクが会話の中で、どの粗野なイウデンでも母親の乳から受け継いでいるのだから彼よりロシア語を知っている、血の中にあるのだ、と言ったためである。

(9)の例は、原因節における動作の結果状態そのものが原因として取り上げられていると解釈できる。原因節における結果状態 (на выставке выпал снег и обложил павильон) は消えることなく、結果節の動作 (чувствовались) の生起を常に促している、と考えることができる。

(8), (10)の例では、原因節の発話は結果節の動作のきっかけとなっているものと捉えることができるが、しかし同時にその発話内容が聞き手に及ぼした影響というものも無視することはできない。「言われた状態」を結果状態としてその様相を明確に思い浮かべることが難しいが、しかし発話の影響力が持続しやがて消滅したことが *целую неделю* や *некоторое время* などの語句や不完了体の採用に表れていると考えることが可能だろう。

4. 不完了体動詞が原因事態を構成する場合

原因節に不完了体動詞過去が用いられる場合、その動作は結果事態と時間的に並行する原因となっていることがほとんどである。

4-1. 結果節において不完了体動詞が用いられている場合

4-1-1. 原因と結果の動作が時間的に重なる場合

原因節の動作が結果事態と時間的に並行する場合である。

(11) Сапожников пошел в вокзальный ресторан и сильно отметил конец отпуска под музыку радиолы, которая *гремела*, **потому что** в нее кидали пятаки.²⁴

サポジニコフは駅のレストランに行き、硬貨 [пятки] が投げ入れられていたために響いていたラジオレコードプレイヤーの音楽の下で、休暇の終わりを強烈に感じた。

このように、原因にも結果にも時間的な限定をもたない反復や状態が用いられる例では、原因節は結果事態に対して継続的な動機を与えている。

原因と結果とで事態が同時に進行する場合もある。

²⁴ Анчаров. Самшитовый лес.

(12) Но прогулки становились все короче, **потому что** короче становились дни.²⁵

しかし日が短くなっていったので、外出はますます短くなっていった。

これらもまた、一定の期間にわたって継続的に原因を提供する不完了体である。この機能が原因節に不完了体が用いられた際の基本的な機能であると考えられる。

4-1-2. 原因と結果の動作が時間的に重ならない場合

原因・結果の両方に不完了体が用いられる例において、原因節の事態が結果節の事態に時間的に明確に先行しているのは、一般的事実の意味²⁶ の1例のみである。

(13) Петрович знал, как вкусны столовские котлеты — **знал потому, что** когда-то они с Петей угощались этим деликатесом во время своих долгих прогулок-путешествий по городу.²⁷

ペトロヴィッチは食堂のカツレツがいかにおいしいか知っていた。知っていたのは、いつだったか、街の長い散策のときに、ペーチャとともにその美味を楽しんだからである。

この例においては、*когда-то* の存在が動作の隔絶性²⁸ と達成時点の不定性²⁹ を示しており、また、「食べたこと」の動作の存在／不存在³⁰ がまさしく問題とされているが、これは一般的事実の意味³¹ の特徴である。

4-2. 結果節において完了体動詞が用いられる場合

結果節に完了体動詞が用いられたとき、原因節の事態と原因節の事態が時間的に重なるとは捉えにくい例が出てくる。

²⁵ Зайончковский. Петрович.

²⁶ *На стене справа висела картина* (Апресян Ю.Д. Избранные труды. Т. II.: Интегральное описание языка и системная лексикография. М., 1995. С. 35.); この例文は共時的参照点(描出された過去の時点において、絵は観察者の目の前にある)、回顧的参照点(話者はいつか絵がかかっていたことを記憶しているが、描出された時点においてはかかっていない)の両方から解釈が可能な文となっており、それぞれ現実的持続の意味、一般的事実の意味であるとする。ここに、ある時点における結果達成を含意する動詞が用いられた場合、完了体との競合が生じる: Падучева Е.В. Семантические исследования: Семантика времени и вида в русском языке; Семантика нарратива. 2-е изд. М., 1996. С.12, 32.

²⁷ Зайончковский. Петрович.

²⁸ 結果状態が発話時点もしくは参照点において保存されていないという特徴。

²⁹ 動作の終了もしくは結果状態の到来の時点が不定もしくは指示されないという特徴。

³⁰ あるいは事実性。動作の存在の有無を問題とする。

³¹ Падучева Е.В. Семантические исследования. С. 36-41.

(14) Бобров Сапожникова к себе *взял*, **потому что** любил образованных, а Сапожников и на мотоциклетке *ездил*, и на лошади *катался*, и мины вслепую *собирал* и *разбирал*, и бокс *умел* - его Маяковский боксу учил.³²

ボブロフがサポジニコフを採用したのは、教養ある者が好きだったからである。そしてサポジニコフは自動二輪も乗って馬も駆って、見ずとも地雷 [мины] を組み立て解体もしたし、そしてボクシングもできた [からである]。彼にはマヤコフスキーがボクシングを教えた。

このように恒常的な性質を示す動詞が原因節に用いられている場合、比較的明確に時間的な包含関係をみることが出来る。しかしこの例の原因節で示されているのはボブロフの下した判断の根拠としての原因であり、客観的な時間推移の中で捉えきれものではない。このようなタイプの原因については、後 (6. 考察) に改めて触れる。

原因が結果節の事態に先行する例はそれほど多くない。

(15) И ноги сами *принесли* его к ипподрому, **потому что** оттуда тоже *доносилась* музыка.³³
そして足は自然と彼を競馬場に運んだ。そこからも音楽が届いていたからである。

この例では、原因節の事態は、結果節における動作の完遂に至る動機を示している。そして原因は不完了体で示されており、原因節動作の完遂にいたるまで、継続的に時間幅をもって動機を与えているものであると捉えられる。

反復や継続した動作でなく、かつ一回の動作であれば、それは動作がテーマ化することによって不完了体化するアクション的な意味 (акциональное значение)³⁴ であると考えることができる。

(16) А дедушка совал молоток. Оказалось, он просто спрятал его в свой ящик, а мусоропровод *хлопнул*, **потому что** бабушка *выбрасывала* мусор.³⁵

祖父が手渡したのはハンマーだった。祖父はハンマーを箱に隠していただけであり、ダストシュート [の蓋] が鳴ったのは、[祖父ではなく] 祖母が [ハンマーではなく] ゴミを投じたからだった。

³² Анчаров. Самшитовый лес.

³³ Там же.

³⁴ 回顧的参照点をもつという一般的事実の意味と同じ特徴を持つが、動作の存在/不存在が問題になっていないため、Падучеваはこれを一般的事実の意味から区別している: Падучева Е.В. Семантические исследования. С. 48-49.

³⁵ Санаев. Похороните меня за плинтусом.

文脈をみると「ダストシュートが鳴ったこと」は既に言及されており、誰かが何かを「捨てた」という行為の存在は前提化、テーマ化されている。ここでは「祖父」ではなく「祖母」が、「ハンマー」ではなく「ゴミ」を捨てたのだということが、新しい事実、テーマとなっているのである。

この例においては原因事態と結果事態の間に時間的な隔絶性が観察されないが、これはアクション的な意味の特徴である。³⁶ この意味においては、動作のテーマ化³⁷ 自体が、不完了体を使用する大きな動機となっていると考えられる。

5. 結果節において動作が否定されている場合

結果節において動作が否定される場合においても、原因節で用いられる動詞の体によって、ある傾向が見て取れる。

5-1. 原因節に完了体動詞が用いられる場合

まずは原因節において完了体動詞過去が用いられた場合についてみていく。

このとき、少数の作品に限定されてはいるが、*успеть* が否定される場合が目立った(9例)。この場合、否定される動作は「やりかけていた」あるいは「やろうとしていた」動作であることが多い。

(17) Федор *не успел ответить*, потому что в комнату вернулся Курилов.³⁸

クリロフが部屋に戻ってきたので、フョードルは答えることができなかった。

(18) Сергей *не успел ответить*, потому что он вдруг заметил, что в салоне отсутствовали его вещи.³⁹

セルゲイは答えることができなかった。広間にかれの荷物が無いことに突然気がついたからである。

(19) 'И я его прекрасно понимаю', - хотела сказать Пойабхатра, но опять *не успела*, потому что на станке произошло новое чудо.⁴⁰

³⁶ その他、達成時点の不定性などの指標も、アクション的な意味においてはあらわれない: Падучева Е.В. Семантические исследования. С. 48.

³⁷ さらに一般的事実の意味との比較で論じれば、動作の存在を前提とするならば、動作の存在/不存在は問題になりえないということである。したがって、動作の存在/不存在を問題とすることを一般的事実の意味の要件とするならば、例(16)は一般的事実の意味ではありえないということになる(脚注33参照)。

³⁸ Уланов. АНО.

³⁹ Там же.

「わたしだって彼のことはよく理解してるわ」ポイアブハトラはそう言いたかったが、またもかなわなかった。台の上で新たな奇跡が起こったからである。

共通するのは、原因節と結果節との時間的接近性である。原因節における動作は、文脈で示される動作（発話やその準備など）の進行中に生起するものとして描かれているということが、セリフの中断、вдругなどに表れている。また успеть 自体「〈…〉する間がある」とも訳されるように、⁴¹ 時間の概念を包含するものであり、その否定によって事態間の接近性を表しうることは、не успеть, как …のイディオムにも明らかであろう。

一方で、時間的な接近性は示しながらも、同時に、原因となる動作の結果状態が結果節と共時的関係にあることが観察される例もある。

(20) — Нет, что вы... — Юлия не успела договорить, потому что Дарислав уже привстал и начал сосредоточенно искать у себя сбоку.⁴²

「いいえ。あなたが……」ユーリヤは最後まで話すことができなかった。ダリスラフが既に腰を上げて、熱心に自分の体を探りはじめたからである。

ただこの場合にも、「動作を遂行できる以前の状態」から「動作を遂行できない今の状態」への移行がみられ、原因節の動作はその変化の起点となっている。

また、とくに успеть が用いられていないものについては、接近性が明らかではない場合もある。

(21) Оказывается, нас не вывезли на работу потому, что в лагере началась эпидемия тифа. Карантин. Лагерь закрыт.⁴³

どうやら、我々が労働に連れだされなかったのは、キャンプでチフスの流行が始まったからのようだ。検疫。キャンプは閉鎖。

原因節はその結果節時点とは時間的に隔絶している。このとき、原因としてより問題とされているのは動作そのものではなく、むしろその結果状態であると考えられる。

これは結果部分に不完了体動詞過去が用いられた例に類似する。

⁴⁰ *Кэтринус Й.* Пойабхатра, дочь Рукмини [http://lit.lib.ru/j/jaelxme/poyabhatra_1.shtml] (2015年10月24日閲覧).

⁴¹ 『研究社露和辞典』東郷正延, 染谷茂, 磯谷孝, 石川正三編, 研究社, 1988年, 2478頁。

⁴² *Вельбой Ю.А.* Каменные могилы [http://lit.lib.ru/w/welxboj_j_a/kamennimogili.shtml] (2015年10月24日閲覧).

⁴³ *Рольникайте М.Г.* Я должна рассказать [http://lit.lib.ru/r/rolxnikajte_m_g/text_0010.shtml] (2015年10月24日閲覧).

(22) Собаки больше *не бегали* по его грядкам, **потому что** человек просто *отремонтировал* забор.⁴⁴
彼が単に柵を直したため、犬はもう彼の畝を走らなくなった。

больше не とされているように、結果は一定の時間幅を持つ。まさに結果状態（柵が直っていること）を前提としているが、一方で起点となる状態変化が念頭におかれている。すでにみたように、結果状態そのものが原因とされている場合は継続的な原因を提供しうるものと考えることができる。

5-2. 原因節に不完了体動詞が用いられる場合

原因節に不完了体動詞が用いられた場合は、そのほとんどは共時的な状況を描写するものであり、完了体とは違って、「やりかけていた」「やろうとしていた」動作を中断するものではない。

不完了体動詞が原因節に用いられる場合について、結果節に *успеть* に対応する *успевать* が出現する例は出なかったが、*мочь* を用いた例があった。

(23) Но каждый раз, когда кончался номер, Сапожников никак *не мог обрадоваться* взхлеб, **потому что** на доньшке всегда *трепетала* болевая точка, ожидавшая, что праздник сейчас кончится.⁴⁵
しかし演目がおわったときはいつも、サポジニコフは夢中になって喜ぶことはできなかった。もう祝日が終るのだと予期する痛点が、底のほうでずっとはためいていたからだ。

(24) То, что происходило за пристройкой, на так называемом "пяточке", уже *не могли видеть* сторонние наблюдатели - *не могли*, **потому что** "пяточок" огораживали две слепые стены и забор.⁴⁶
増築部分のうしろ、「ピタチヨーク」とよばれる場所で起こったことは、野次馬たち〔сторонние наблюдатели〕はもはや見ることができなかった。できなかったのは、「ピタチヨーク」がふたつの窓のない〔слепые〕壁と、柵で囲われていたからである。

(23)の例では、「毎回（каждый раз）」という語があるとおり、反復された状況が描写されている。(24)は уже によって「以前は見ることができた」ということを含意するものであるが、原因節を見れば「そのとき、その状況下において」見ることができないということを示す文であることがわかる。

⁴⁴ Рудь. Духовное врачевание или Реодчизм.

⁴⁵ Анчаров. Самшитовый лес.

⁴⁶ Зайончковский. Петрович.

次の例は結果節において完了体動詞が否定されているものである。

(25) — Неужели?! — его пронзила догадка, и он *не запрыгал* от радости только **потому, что сидел**.⁴⁷

「まさか!?!」 [自身の] 推察に突き刺されて、彼が喜びに跳ねはじめなかったのは、座っていたからでしかない。

やはりここでも問題となっているのは、「そのとき、その状況下において」できなかった（動作をはじめられなかった）要因である。сидетьという状況によって、その事態の生起が阻害されているのである。

6. 考察

6-1. 完了体と不完了体の典型

完了体動詞過去による原因のひとつとして、時間的空間的に原因と結果が隣接する例があった。ここでは、原因と結果は連続体としてのひとつの流れの中に置かれており、原因節における動作そのものが結果節に対する時間的な起点、トリガー、きっかけとなっているといえる（図1左）。

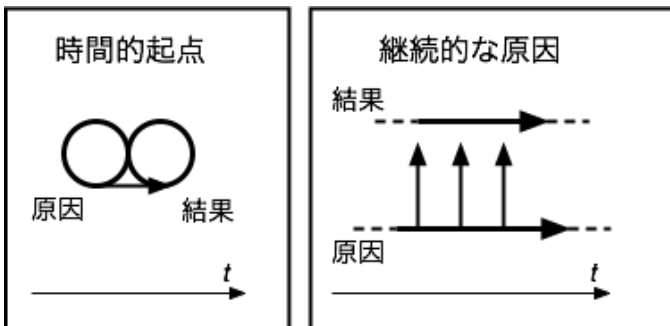


図1 時間的起点と継続的な原因

このような時間的な起点が存在しないのが、不完了体動詞過去による原因が結果事態と共時的に描かれる場合である。起点の不存在がもっとも特徴的にあらわれるのは動作が別の動作（プロセス・反復・状態）全体に対する継続的な原因を与える場合であり、これは原因節にも結果節にも不完了体を用いられる場合の典型例であるといえる（図1右）。

⁴⁷ Вельбой. Каменные могилы.

「完了体は変化を意味し、時間を前にすすめる。新たな観察時点を作り出す。対して、不完了体は、一般的に、変化しないことを意味し、新たな観察時点は作り出さない」⁴⁸ というが、このような体の一般的な性質が *потому что* の複文においても同様に当てはまると考えられるのである。

しかし、これまで例を見てきた中で、このような客観的な時間推移の枠組みだけでは捉えきれない例もあった。

(26) (=14) Бобров Сапожникова к себе *взял*, **потому что** любил образованных, а Сапожников и на мотоциклетке *ездил*, и на лошади *катался*, и мины вслепую *собирал и разбираал*, и бокс *умел* — его Маяковский боксу учил.⁴⁹

客観的な時間関係だけを見れば、*любил* という性質が *взял* という事態を包み込んでいるが、継続的な原因であるとはいえない。そして時間的起点ともならないのである。この例で原因とされている事態は、判断の根拠として取り上げられているものであり、あるいは、次の節で見るとような、「理由」であると考えられる。

6-2. 一般的事実の意味

(26)の例と同様に捉えがたいのが、不完了体一般的事実の意味が原因節に用いられた場合である。しかしこれについても、「時間的起点」と「継続的な原因」の二つの特徴によって説明することを試みよう。「事実は空間や時間上のもではまったくない」⁵⁰ という Vendler の言葉は、動詞のAspectとは別の文脈で語られたものではあるが、一般的事実のもつ特徴（隔絶性、 unlimited回数など）を見事にとらえている。⁵¹ そして、もし動作が空間や時間上のものでないのであれば、これは明らかに時間的起点を与えない。抽出できた例文を改めてみてみよう。

(27) (=13) Петрович знал, как вкусны столовские котлеты — **знал потому, что** когда-то они с Петей *угощались* этим деликатесом во время своих долгих прогулок-путешествий по городу.⁵²

⁴⁸ Падучева Е.В. Основные понятия в аспектуальной концепции Ю. С. Мослова // Актуальные вопросы современной славянской аспектологии: материалы. Кобе, 2015. С. 32.

⁴⁹ Анчаров. Самшитовый лес.

⁵⁰ Z. Vendler, *Linguistics in philosophy* (NY: Cornell University Press, 1967), p. 144.

⁵¹ 実際、一般的事実の意味の「事実性」について、ПадучеваがVendlerのこの見解を適用することを試みている: Падучева Е.В. Каузальное отношение, факт и общефактическое значение русского глагольного вида // Каузальность и структуры рассуждений в русском языке. М., 1993, С. 27-28.

⁵² Зайончковский. Петрович.

結果節には不完了体動詞が用いられており、かつ、恒常的状态を表現している。この例文では知ることとなった時間的起点ではなく、まさしく「知っている」ことを判断できる根拠として、「食べたことがある」という事実が存在することを指摘しているのである。一般的事実の意味にあつては英語の経験パーフェクト⁵³との類似が指摘されている。⁵⁴「美味を楽しんだ」ことは過去の動作として客観的な時間推移の中に位置づけられるものではなく、経験という語が示すように、ある種の主観的な認識を前提とするものである。客観的な時間推移の中に位置づけないということ、そして「判断根拠」ということについては、一般的事実の意味と因果関係の両方の文脈において、以下のように言及されている。

事象を時間的流れのない、静的な一つの事実の存在ととらえることで、語る主体はそれを一つの判断根拠として扱うことができるようになる。⁵⁵

「原因」は時間的推移を包含した概念であるのに対して、「理由」は無時間的である。よって、痙攣して倒れたという時間的推移を有す出来事に対しては「原因」が適用されるが、友達に意地悪をする根拠は、意地悪をすることを納得させる正当化の論理が問われているのであって、そうした論理はいつ誰が誰に意地悪をしようとするかという意味で時間から独立なので、「理由」概念が当てはめられる。⁵⁶

これらに即せば、一般的事実の意味によって示される原因は「理由的」だということもできる。そして、いつでも当てはまる論理というのは、前節(26)の恒常的性質に類似するものと考えられる。

6-3. その他の意味

次のような、分析の時点では原因と結果の関係性を明確に位置づけられない例があった。

(28) (=8) Один раз я прошелся задом наперед и боялся потом целую неделю, **потому что** бабушка сказала: "Кто ходит задом, у того мать умрет".⁵⁷

⁵³ つまり、experiential perfect: e.g., *Bill has been to America*: B. Comrie, *Aspect: An introduction to the study of verbal aspect and related problems* (Cambridge: Cambridge University Press, 1976), pp. 58-59.

⁵⁴ Маслов. Перфектность. С. 440.

⁵⁵ 林田理恵『ロシア語のアスペクト』, 106頁。

⁵⁶ 一ノ瀬正樹『原因と理由の迷宮「なぜならば」の科学』, 5頁。

⁵⁷ Санаев. Похороните меня за плинтусом.

ここにおいて原因節の発話という行為が時間的起点となっていると考えられるが、同時に、その発話内容は結果節事態に一定の時間幅に渡って影響を与え続けている。発話内容は、*боляся* という動作を正当化する根拠（理由）とされていると考えられる。

その他、完了体動詞による結果状態そのものが原因として取り上げられるものがあった（9など）。この場合、原因節における動詞は、きっかけ、トリガーとしての時間的起点とはいえない。一方で原因として状態が取り上げられるということは、その状態が消えないかぎり継続的に原因として作用し続けるということである。（図2）。

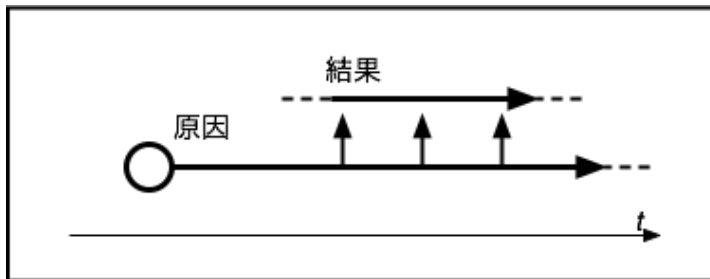


図2 状態パーフェクト

7. まとめ

потому что の複文における因果関係のあり方に、動詞の体がいかに関わっているかを検討してきた。「時間的起点」は完了体的であり、「継続的な原因」は不完了体的であるというのは、客観的な時間推移を基準に置いたときに、因果関係と体の関わり方の典型をなしていると考えられる。

完了体動詞が時間的起点となる場合は、事態の継起的展開と相性が良く、これは、集計結果で見た、原因節に完了体が用いられた場合に結果節においても完了体が用いられることが多いことの理由のひとつに挙げることができるだろう。

不完了体一般的事実の意味についていえるのは、これが原因節に用いられるとき話者にとって「過去の動作」というよりは判断根拠となる「事実」として持ち出されており、回顧的に過去の出来事に言及していたとしても、原因としては「いつでも当てはまる」ものであるということだろう。その機能は不完了体が恒常的な性質を表す場合に類似する。

その他の意味についても、「時間的起点」「継続的原因」という指標に基づく記述・説明の可能性を示した。

資料

いずれも [lib.ru] より、2015 年 10 月 24 日閲覧。閲覧時のランク（脚注 9 参照）に従って整列し、番号をふった。

1. *Анчаров М. Л.* Самшитовый лес.
2. *Бодрийяр Ж.* Симулякры и симуляция.
3. *Рольникайте М. Г.* Это было потом.
4. *Вельбой Ю. А.* Каменные могилы.
5. *Юрий Сергеев Ю. В.* Становой хребет.
6. *Пру Э.* Горбатая гора.
7. *Рудь В. Н.* Духовное врачевание или Реодчизм.
8. *Сиблейрас Ж.* Ветер шумит в тополях.
9. *Анчаров М. Л.* Теория невероятности.
10. *Уланов О. В.* АНО.
11. *Красногоров В. С.* Легкое знакомство.
12. *Стеценко О. В.* Как не пить.
13. *Оскотский З. Г.* Имитация
14. *Морозова Т. Ю.* Три грации.
15. *Санаев П.* Похороните меня за плинтусом.
16. *Михайличенко Е., Несис Ю.* Большие безобразия маленького папы
17. *Красногоров В. С.* Жестокий урок
18. *Шаргородские Лев, Александр.* Венецианский Купец.
19. *Лебедева Г. В.* Как Маша поссорилась с подушкой.
20. *Фугелова Т. А.* Инженерная психология.
21. *Молостов В.* Акупрессура.
22. *Каэтримус Й.* Пойабхагра, дочь Рукмини.
23. *Шаргородские Лев, Александр.* Зеленые скамейки.
24. *Ашкинази Л. А.* Почему 220, или Девять лет ползучей революции.
25. *Михайличенко Е., Несис Ю.* З.Б.
26. *Беляев И. Д.* Пространство сознания.
27. *Сартинов Е. П.* Обретение Рая.
28. *Сергеев Ю. В.* Наследница.
29. *Рольникайте М. Г.* Я должна рассказать.
30. *Машковцев В. И.* Золотой цветок - одолень.
31. *Стукалин Ю.* По закону револьвера: Дикий Запад и его герои.

32. Уланов О. В. Ано-2.
33. Качалов А. Роковая встреча (Победители).
34. Аикинази Л. А. Эмиссия? "Это просто."
35. Лебедева Г. В. Считалочка.
36. Зайончковский О. Петрович.
37. Гринберг Я. Как В Этой Жизни Не Сойти С Ума
38. Шумак Н. Н. Книжная девочка.
39. Дежнев Н. Б. Асцендент Картавина.
40. Овсянкин Е. И. Имена Архангельских улиц. Ч. 2. Топонимия города.

Вид глаголов в предложениях с союзом «потому что»

ЦУНЭТО Сёго

В этой работе проводится наблюдение над выбором вида глаголов в предложениях с союзом «потому что». Цель работы заключается в том, чтобы выяснить суть видов.

До сих пор в нескольких исследованиях виды глаголов использовались для классификации и анализа конструкций с союзами, которые обозначают причину, следствие, условие, уступку, цель и т. д. Но не было обратного, т.е. такие конструкции не использовались для анализа видов глагола. Однако, учитывая точку зрения, что выбор вида ограничивается при взаимодействии ситуации и “субъективного сознания говорящего” (Хаясида 2007), мы можем считать союз потому что инструментом анализа значения видов. В результате наблюдений, какую именно ситуацию говорящий считает причиной при выборе вида, нам становится доступным субъективное сознание для описания видов.

Специальной целью работы является выяснение конкуренции между общефактическим значением НСВ и значениями СВ. Ниже указаны главные цели и намерения. В сложных предложениях выяснить:

1. тенденцию в выборе вида (и объяснить эту тенденцию),
2. причину выбора общефактического значения НСВ,
3. сущность общефактического значения НСВ.

В качестве материала для анализа использованы предложения из 40 популярных произведений, находящихся в электронной Библиотеке Максима Мошкова (lib.ru). По нашему критерию для последовательной разработки нам необходимы были случаи, когда подчиненные предложения следуют за главными предложениями. Всего было получено 855 примеров. Но из этого числа мы исключили примеры, в подчиненных предложениях которых использованы слова НЕТ, НЕ, БЫТЬ, МОЧЬ и т. д., потому что они усложняют анализ. Наконец у нас осталось 177 примеров.

Результаты анализа таковы:

1. Если в подчиненных предложениях использован СВ, то и в главных предложениях есть тенденция к использованию глагола СВ.

2. Если в подчиненных предложениях использован НСВ, то такой тенденции не наблюдается.

Во многих примерах действие глагола НСВ как причина дает продолжительный повод к результативному действию. А действие глагола СВ как причина, будучи смежным с результативным действием, играет роль спускового крючка. Поэтому в работе делается заключение, что прототипической для СВ является функция временного отправного пункта, а для НСВ – продолжительный повод, и эти функции играют главную роль для вышеуказанной тенденции.

Исходя из этих прототипов, автор также рассматривает вопрос об общефактическом значении НСВ и приходит к следующему выводу. Когда оно используется в подчиненных предложениях, это действие не имеет конкретного момента в развитии ситуации, и, естественно, действие не может быть отправным пунктом. Наоборот, действие существует как факт одновременно с результативным действием, и оно способно быть продолжительным поводом.